

後輩戦友は沖繩玉碎

ソ連国境の緊張の警備

山形県 大川 進太郎

私が徴兵検査を受けた昭和十四年の時代は支那事變もだんだんに進展していて、特に東北地方の農村の人は、満州の開拓団へ行く者もあるし、特に二、三男は自分から進んで軍隊へ志願をして入隊していった人もいた。私は山形県赤湯温泉の北の方へ入った現在の長井市五十川という所の農家の次男として生まれた。生来体格も良く健康にも自信あり、いってみれば頑健な体を両親からいただいで兵隊検査に臨んだ。勿論、甲種合格であった。覚悟はしていたものの、いよいよ故郷を離れ未知の世界、しかも厳しい軍隊、当然戦地行きだろうと思うと、何か身が引き締まり、一人前の男になった自覚と不安が続いたことは事実であった。

私は当然地元の山形の連隊へ入営と思いい込んでいた

が、入営は北海道旭川の連隊ということであった。何かとは後で分かったことだが、東北育ちの私が、もっと寒い旭川へ行くのは何かいやな気がしたものの、入営後はさらに酷寒の満州へと移ったのです。

【解説】 (一)

昭和十四年のノモンハン事件の影響で「昭和十四年在満軍備改編要領」「同陸軍航空部隊編成要領」により「改定満州駐屯陸軍部隊編成」等が制定された。満州駐屯部隊は、平時編制と戦時編制の中間で戦時に近い編制とされた。

第三次改編で、第八師団（弘前師団）と第十一師団（四国善通寺）は四個連隊が三個連隊編制となり、第二十四師団を編制した。そのため、第八師団隷下の歩兵第三十二連隊（山形）が第二十四師団の編制下に入り、四国松山の歩兵第二十二連隊、第七師団（旭川）からの歩兵第八十六連隊をもって三個連隊編制が成りたったのである。それにより、昭和十四年五月十九日大陸命第三百二号をもって、第五軍の編組が下令され

関東軍に編入、以来安東（安東省）及び以東地区の満
ノ國境に駐屯し、對ソ有事の場合、東部攻勢の外翼軍
たるべく諸準備に従事していた。

第五軍隷下部隊左のごとし。

第十一師団（虎林） 第二十四師団（東安）

第二十五師団（新設大坂・和歌山）（林口）

第三國境守備隊（半截河）、第四國境守備隊（虎頭）

第十二國境守備隊（廟嶺）、第二戰車団司令部（東安）

騎兵第三旅団（宝清）軍直轄部隊

野戦重砲兵第二十連隊（斐徳）

関東軍第二高射砲隊司令部（東安）

高射砲第九連隊（東安）、高射砲第十八連隊（勃利）

入營は昭和十五年二月、北海道旭川連隊であった。

山形の歩兵第三十二連隊は軍旗を持って、第二十四師
団へ編入されていたからであると教えられ、ようやく
納得することができた。第七師団（旭川）は内地にお
り、我々の留守、補充隊であったようだ。一週間は旭
川で、兵隊としての心得や訓練をしたが、列車で大坂

へ、さらに輸送船で朝鮮の羅津まで航行だが、約一週
間の船旅というより船倉の蚕棚のような所へ押し込め
られての輸送は、人間ではなく貨物扱いといった方が
適当な言葉のようなひどいものであった。

このようなことは、だれもが海上輸送中体験したも
のであるが、山形の山の盆地で暮らした私にとっては、
荒れる日本海を突っ切っての一週間は、船酔いはする、
食事は喉を通らぬ、船底から特殊な悪臭が船内に充満
するは、船は波に翻弄されるは、で生きた気持ちもし
なかつた。日が立つにつれ、だんだんと慣れはしたが、
羅津へ上陸したときは、げっそりとやせたものである。
しかし陸へ上がれば船酔いは覚めたが、零下何十度の
寒気が待っていた。

旭川から乗った兵員はほとんど初年兵で、満州第八
〇三部隊から受領に來られた軍曹に引率され、羅津か
ら列車輸送で鮮滿國境を越え東安省密山へ着いた。

密山は興凱湖の北、ソ滿國境防衛の拠点であると聞
かされたが、我が連隊の駐屯地である。しかし、満州
蜜山の三月の寒さは旭川の比ではない厳しいものであつ

た。旭川でも凍傷にかかったのであるから、寒さに耐え、凍傷にならぬよう、軍務に励まねばならない。

本兵舎はオンドル式で暖房されているが、新設師団であるためか、我々初年兵は現地の苦力（人夫）が住んでいるような家と同じだ。泥土を固め天日乾燥された煉瓦を積み上げ、煉瓦の間には草を入れ崩れないようにしてあるのだ。

兵舎の中はオンドル式ではなくストーブであるが、思ったより暖かかった。しかし、私の故郷山形のように雪が積もれば暖かいのだが、満州は粉雪で風が強い、風速一メートルでは体温が一度下がるといわれるから、風が吹くとつらかった。しかし、耐寒訓練は兵舎と兵舎の間の広場で行われるが、とにかく風の強い中での訓練は腹の底まで凍るようなつらさである。寒くとも初年兵訓練はおかまいなく続く、鍛えなければ強い兵隊はできないのだからと、鬼の関東軍の訓練は厳しい。北国育ち、農業で鍛えられた私でも随分つらい思いであつた。

我々の兵舎は苦力小屋に等しい十坪にも満たぬ小さ

な建物で、その中に一個班二十人くらいが入っている。そのうち半分は古参兵だから、初年兵は毎日ビンタをとられるから顔の皮も厚くなるぐらいである。食事はアルミ製の食缶に入れ炊事場から持ってくる。主食は米なのだが、しかし、一番初めに出色されたのは赤い飯で、我々初年兵を赤飯で祝ってくれたのかと思つた。食べてみたら高粱の入った飯物である。米と高粱を一緒に炊いているから、米は煮えても高粱は煮えにくい、食べるのには固くて苦労した。しかし、副食は比較的良かったように記憶している。

寒い時でも、演習や行事は、野外以外は防寒具は着せてもらえなかった。私は軽機関銃班であつた。銃は十一年式軽機で、分解した部品は夜間明かりがなくても組み立てできるように訓練される。細かい部品でも一つ欠けてはならない。演習中は小さなバネを落とし、全員が這って探したこともある。これも教育の一課程であつたが、部品一つ無くても銃は撃てぬ。兵器を大切にすることを身をもって体験させられたのである。

射撃のときの引き金を引く点射の要領など、指先の

ちよつとした具合で弾が出なくなる。機関銃であるから、指先の動かし方一つで二発、三発、五発と射撃するのである。また、軽機といつても重さは四キロくらいあり、小銃手よりは体力的にも優つた。運動神経の発達した者が選ばれる。また、戦闘となると、姿勢が高いし、敵から一番狙われ犠牲が一番多いとされている。そのため特に厳しい訓練が行われるし、小隊の重要な戦力であるから、理屈でなく軍隊は体で覚えなければ、「いざ」というとき、役に立たない。

演習のないときは暇さえあれば銃剣術で鍛えられる。特に第二大隊第五中隊は厳しかったし、強かった。伝統ある第五中隊の誇りでもあった。入営後三カ月くらいで第一期の検閲があり、満州の気候もやっと春近しを感じはじめる。満州の春は五月からだ先輩たちも長閑な気持ちになつてきて、幾分我々もなじんできた。春となると射撃大会で、成績の良い者は選手として出場、他の者は監視哨勤務が多かった。

我々の部隊は東安省でソ連国境線に接しているので主たる任務は国境警備の監視である。国境は興凱湖も

横切っている。その湖は冬となれば凍結してしまう。ウラジオストックも、ハバロフスクも国境近くのソ連領にある都市があり、ソ連軍海陸の要衝である。監視哨といつても大要塞の中にあるのではなく、普通の苦力小屋のような分哨であり、山地の稜線の手前にあり、一日中倍率の高い双眼鏡で監視するのである。対手側のソ連軍も精鋭部隊を配置し、一触あれば即発するという、緊張の連続である。

夜になると、真の暗闇で何も見えない。その中で監視するのだから監視哨では犬を飼っている。犬は臭覚も聴覚も人間より優れて敏感であるから、わずかな異常でも察知する。シベリアにも満州にも狼がいて、その遠吠えは不気味なもので、兵器を持った我々兵隊でも余り良いものではない。全神経を耳と目に集中させての監視は心身を疲れさせる。特に敵がいつ侵入してくるか分からない。そんなときには犬は随分と頼りになる。

国境というが、日本の警備している国境とソ連の主張している国境線は同じではない（ノモンハン事件が

その一例で、両者で对手が国境を侵犯したと主張した。ソ連軍は毎日馬で巡察に来る。日本の国境を越えて来るわけである。しかし、我々は命令がなければ対手を撃てないし、威嚇射撃もできない。ソ連軍は弾薬が豊富なのか、威嚇のためか撃ってくる。また、ノロという鹿の一種を食糧とするためか、演習のためか撃っていた。

監視哨勤務は一週間くらいで一部ずつ交代する。一度に交代すると敵状の変化を察知することができないからである。分哨はほとんど立哨で、監視が主任務である。各分哨間の連絡はやらす、小哨（小隊）から、それぞれの監視哨へ連絡、指示、命令が伝えられる。しかし、初年兵は連続立哨させられることが多い。古参兵は現地人から、通称チャン耐という強いお酒を買って飲んでいる。この酒のアルコール分は約九五パーセントといわれ、消毒用（医務用）アルコールの代用をしていたが、一種独特の臭いがして、だれかが飲んでいれば兵舎全体がチャン耐臭くなる。

監視哨勤務は約一年であり、第八〇三部隊（連隊）

に帰ったのは入営二年目というわけである。蜜山は満州人の部落で、土塀に囲まれた城門のある街である。連隊には北海道から初年兵が来て、山形の兵隊と入れ替わった。私も二年兵となり、行軍をしたり、訓練はあったが、炊事勤務を命ぜられた。

炊事というと、軍隊では楽な勤務の代名詞で垂涎的であるという人がいて、私自身も楽な勤務だと思っていたが、古い兵隊が多く、長は軍曹。私の役は蜜山から軍倉庫のある東安までの糧秣受領の責任者である。連隊の兵力は五千名、馬匹二千頭の一日の糧秣を毎日受領して満鉄のトラックで輸送するのである。私が長で、各中隊から二人ずつ出された使役を指揮して積み降ろしをする。しかし、苦力は余り使わなかった。

苦力が作業すると、糧秣の員数が足りなくなることがあるのだから兵隊だけで運搬していた。「軍隊で苦労するのは員数合わせ」だ、とよく言われる。数に対しては大変厳しい。とにかく、数を合わせねば責任問題となり、足りない分は担当が何とかしなければならぬ。炊事では特に、やかましい、余るといふこ

とはだれかに飯を食べさせない、欠食者があるということだ。表へ出せば重大問題となる。一般の会社や家庭では、物を節約し備蓄することは美德なのだが、軍隊は地方の常識と異なる点が多い。

員数が足りなくなると、特に経理検査の前は、兵舎の中でも盗まれる。班長は帳簿担当だが、現物は私の担当。それが合わぬと一週間くらい寝ずで合わせねばならず苦労する。倉庫の中の米は足らず、余っているのは高粱だけ。高粱は食べにくいので余り使われない。その分米が多く使われる。炊事係も人情として、うまい物を食べさせたいし、残飯を残したくないから、自然とそうなるのであろう。

連隊の倉庫には糧秣の貯蔵が少なくなり、毎日、毎日、東安まで糧秣受領に行くようになったのは大東亜戦争が始まり、内地からの米などが来なくなったためだという。連隊の在庫もだんだん少なくなり、底をついてきたので連日の輸送となったわけです。

燃料の薪でも苦労をした。満州の我が部隊の周囲には木が全然ない、文字通りの広漠たる原野である。そ

のため薪は満蒙開拓団から購入するのである。そこまでは自動車でも四、五時間もかかるのである。開拓団の人たちが木を伐って薪にしてあるのだが、現場までは道路もない。薪をトラックに積むと、薪の重みで車輪が泥土に沈んでしまう。そのため、九台のトラックで一遍に引って張って沈んだトラックを動かすという苦労もあった。次からは薪を敷いて、車をその上に載せて始動するようにした知恵も出た。このように経験を通じて積みながらの炊事勤務を全うした。

炊事勤務は約七カ月、その後第二大隊長の官舎当番を命ぜられ、中隊から大隊本部へと移った。昭和十七年三月末ごろ、我々三年兵は現役二カ年を勤め、満州から入営した留守部隊旭川へ帰って除隊した。

私の満州勤務中の一年前にはノモンハン事件、昭和十六年十二月には大東亜戦争の勃発、前の十六年七月には「関特演」大動員があったので、それらの件にはふれなかったが、満州のソ連との国境で外部と遮断された警備ではそのような情報は全く入らないし、軍隊という所とは特に初年兵などは勤務のみに前向きで、

ただ任務達成一筋である。今の考えでいうと理解しにくい、それら大きな問題を余り知らなかったのである。特にノモンハン事件の惨状や、極秘の対ソ戦職員「関東軍の特殊演習」など知るよしもないし、知らされるはずもないのである。

しかし、もし、大東亜戦争が南方で開始されなかったら、我々の師団はソ満国境第一線で、ソ連最精鋭軍と戦ったかもしれないし、ウラジオストクや沿海州、シベリアの航空基地から、内地への爆撃は朝飯前だから、関東軍は総力を挙げて、それらの基地を撲滅するため一挙に国境を突破するため、大きな犠牲を被むったことであろう。また、我々の第二十四師団は昭和二十年沖繩に移駐し、四月一日米軍上陸以来四カ月近く戦い玉砕したのである。

このように我々師団の運命も、太平洋戦争が勃発しなくとも主戦場満州で壊滅的打撃をうけたかもしれないし、結局、我々の後輩となった戦友は沖繩本島で全滅したのである。部隊と共に兵団と共に我々軍人は有無を言うこともできなく運命を一つにしたのである。

除隊後、私は食糧増産の第一線で働いていたが、二十年二月、いよいよ召集令が来て山形の連隊へ入隊した。陣地は二回ほど艦載機の攻撃を受け若干の被害を受けたが、八月十五日、重大放送あり、終戦の玉音放送を聴いて、前途に大きな不安を持ちつつ帰宅した。しかし、多くの戦友などが再度の召集で、南方で玉砕したり、大陸で戦死したり、満州からソ連へ抑留され強制労働で死亡した者もいる。

私は、私なりに、満州での勤務、内地での防衛に励んだが、幸いにして命を保ち得て本日あることに感謝している。

【解説】(一) 関特演

昭和十六年春までの時期は、主として「軍備改編要領」による部隊内容の充実、完成と小単位部隊の新設であった。

六月二十二日、独ソ両国が開戦した。日本は「南方施策促進ニ関スル件」を決定し、日本と仏印、泰間に緊密不離な関係の設定、とくに日仏軍事的結合を作る

うとした。外交交渉により解決困難な場合には、武力をもって目的を貫徹するとし、あらかじめ軍隊派遣準備に着手した。

昭和十六年七月二日、日本は「情勢ノ推移ニ伴フ帝國国策要綱」を決定し、依然支那事変処理に邁進し、かつ自存自衛の基礎を確立するため南方進出の歩を進め、また北方問題を解決することにした。南北いづれにも応じられる態勢を整えようとするのである。

独ソ戦は、独軍の快進撃が続き、北方問題解決の好機と判断された。しかし陸軍は、慎重に対応策を検討した結果「在極東ソ軍が西送され、八月上・中旬に地上部隊が半減、航空その他軍直轄部隊が、三分の一に減ずる情勢が到来した場合、発動を決意し、九月初頭から作戦を開始する」とした。

これに使用する兵力量決定は難航したが、「対ソ八五万態勢、七月七日動員下令、船舶八〇万屯徴用」(動員の規模は、人員五五万、馬約一三万)として作戦を準備することになった。対ソ態勢とは、満州・朝鮮が主であるが、樺太・千島・内地も含んでいる。

この作戦準備を陸軍中央は「百号」という秘匿名を用いた。関東軍も企図秘匿上「関特演(関東軍特殊演習の略)」と称したので、中央、現地ともこれを使用した。また動員の一語は一切用いず、臨時編制等の一語に取り換えている。

関特演の基本構想は

- (1) 対ソ武力処理準備の第一段階として、在満鮮警備態勢(一六個師団基幹)を二カ月以内に整える。これがために在満鮮部隊を動員するほか、内地から二個師団と軍直部隊の一部を動員派遣する。
- (2) 樺太混成旅団と第七師団を動員
- (3) 航空通信部隊を速やかに動員
- (4) 北千島要塞守備隊を編成派遣
- (5) 軍備充実の再検討
- (6) 南方準備を既定計画による促進
- (7) 内鮮満鉄道を戦時態勢に移す
- (8) 対ソ開戦の場合は、年度作戦計画に基づき、二十五個師団をもって攻勢をとるものとし、これ

に應ずる軍直部隊全部を動員、兵站部隊は七割程度に抑えるというものであった。

七月七日、第一次動員下令、動員は内地全師管で行われ、動員部隊は二百八十余部隊に及んだ。大部は満州へ、一部は北部軍に派遣されたが、要塞関係部隊、補充部隊も含んでいた。

七月十六日下令の動員部隊は、六百七十余部隊に上がった。

師団の編制は、各師団により異なるが、対ソ作戦に策応する編制、装備となっている。

各師団は砲兵団司令部、師団制毒隊、防疫給水部が新たに編合され、野砲兵連隊は四個大隊で、うち一個大隊は十五榴大隊であった。兵力は、

第一師団（野砲）が、約二四、三〇〇名、馬匹約七、

一〇〇頭、軽戦車三〇両、装甲車七両、自動車四三五両。

第九師団（山砲）は約二八、一〇〇名、馬一、〇

〇〇頭、自動車二四〇両、

第二十八師団（山砲）は約二四、八〇〇名、馬約七、

八〇〇頭、自動車約二八〇両

第二十三師団（機械化）は約二六、二〇〇名、馬約

四、五〇〇頭、軽戦車三〇両、装甲車一四両、自

動車約九五〇両である。

その後、八、九、十月になっても一部の動員派遣が続いた。関東防衛司令部、第二十軍司令部は九月、現地で臨時編制され、関東軍の隷下に入った。この未曾有の大動員に伴い大規模な輸送が実施され、満鮮に第一次、第二次輸送が行われ、弾薬は既に三〇個師団分を追送、作戦資材等は関東軍警備態勢に應ずる二会戦分とし、七月下旬から本格的輸送が実施された。

関東軍は当初、国土防衛上最も心配されたのは、沿海州（ウラジオストックなど）を基地とする攻撃機の本土空襲であった。七月五日、防衛総司令部の新設が発令されたが、その権限は弱いものであった。

関東軍が関東演の緒について間もなく、南部佛印進駐の命が出、サイゴンに平和進駐した。これに関連し米英は、日本資産凍結、八月一日、対日石油禁止となっ

た。

他方、対北方武力行使の決断は、八月十五日を目途としていたが、極東ソ連軍の西送は、予期に反して多く行われなかった。陸軍は、八月九日、対北方企画を断念した。

そのため、陸軍の関心は、勢い南方作戦準備、帝国国策遂行要領の研究、検討に移った。八月中旬以降の動員、編制等には、関特演に關係するものと、対南方を含んだことが相錯綜している（二面作戦、陸軍の主敵は北から南へと移り、しかも支那大陸の戦いは続行され、結局三方面の敵に対応しつつ敗戦と向かったのである）。

事故死を免れ生還

満州一二四自動車部隊

岡山県 村本 忍

今の備前市三石で料理旅館業を継いで私は三代目と

して、大正九年三月三十一日に生まれました。私は長男、第五人、妹一人、若いうちはいわゆる「極道者」で、父は「お国のために尽くすなら、死んでも一つも心配ない、兵隊に行け」というので、志願して兵隊に入りました。

大正九年生まれは、昭和十五年徴集ですから、十五年に入営なのですが、私は十三年徴集者と一緒に昭和十四年一月十日、姫路の第十師団輜重兵第十連隊で、初の自動車隊に入営しました。私は、長い剣を下げ、馬に乗るのかと思っていました。期待外れでした。

自動車のことなど何も知らぬので、大部隊られました。父が面会に来たとき、叩かれた瘤を見せたくないので帽子を深く被り、まともに父の顔を見ることができませんでした。

小沢中尉の当番になり、自動車学校へ派遣されました（世田谷の現在の農大の所です）。本来なら八カ月で教育を終えて帰るのを、教育係として残され、昭和十五年十一月に原隊復帰の予定でした。

ところが、部隊は満州の佳木斯^{じふじす}へ満州第一二四部隊